

もっと広がる クスリの世界

身近な薬のリスク

かつて日本で「乱用薬物」といえば、戦後に広がったヒロポンに始まり、1970年代後半には若者の間でシンナーなどの有機溶剤が社会問題となりました。90年代にはハルシオンやリタリンといった医療用医薬品の乱用が目立って、2000年代以降は脱法ハーブなどの危険ドラッグが社会に深刻な影響を及ぼしました。これ

市販薬の乱用を防ぐ

らはいずれも医療や社会に大きな影響を与えてきましたが、いつの時代もオーバードーズ（薬の過剰摂取）は社会問題として存在してきたといえます。

文化の面でもこの言葉は身近になり、日本では、シンガー・ソングライターなどの楽曲「Overdose」が共感を集め、海外ではデミ・ロヴァートが自身の体験を「Dancing With The Devil」で歌にしました。音楽の世界でもオーバードーズは時代を映すキーワードとなっています。

そして、昨今では様相が少し変わり、交流サイト（SNS）を開けば、風邪薬やせき止め薬といった身近にある市販薬のオーバードーズが新たな課題として浮上

しています。国立精神・神経医療研究センターが厚生労働省の委託で行った24年度の調査では、中学生の1.8%が「過去1年以内に乱用目的で市販薬を服用した経験がある」と回答しました。これはおよそ55人に1人の割合です。決して、どこか遠い国の話ではなく、学校や家庭、地域社会で起きている身近な現実といえます。

市販薬は本来、体調不良のときに誰もが安心して使える医薬品ですが、「たくさん飲めば気分が変わる」といった誤情報やSNSで広まり、過剰摂取が繰り返される例もあります。オーバードーズは個人の問題にとどまらず、社会全体で向き

合うべき課題です。教育現場での啓発、家庭での対話、地域の見守り、そして医療従事者の支援が重なってこそ、予防や早期対応が可能になります。

ここで重要な役割を担うのが薬局や薬剤師です。薬剤師は購入者の様子を見守り、必要に応じて声をかけられるゲートキーパーとして、乱用を未然に防ぐ役割を担っています。オーバードーズという言葉を目にするのが増えた今こそ、この問題を私たち一人一人が、身近な問題として考える必要があります。

（辻 大樹・県薬剤師会常務理事、県立大学薬学部教授）

<毎月第4火曜日に掲載>